

大分県における地方史研究と地域史学習

— その接点と今後の方向性 —

佐藤 晃 洋

はじめに

一九九八年一二月に小学校・中学校の学習指導要領が、一九九九年三月に高等学校の学習指導要領が告示された。これらの学習指導要領を読みると、学校における学習活動と地方史研究にこれまで以上の繋がりが求められるようになっていいると感ぜられる。具体的にみてみよう。

小学校社会科においては、第三学年以降の目標に「地域における社会的事象を観察、調査」することが盛り込まれており、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」において、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること。」と明記されている。中学校社会科の歴史的分野においては、目標の(2)に「国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる。」とあり、内容には「歴史の流れと地域の歴史」が新設されている。これには、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身につけさせる。」などの説明が付されている。そして、内容の取扱いに「身近な地域の歴史」、「博物館、郷土資料館など」の活用を考慮することが明記されている。

高等学校地歴科の日本史Aには、「歴史と生活」が新設されている。その中で、「身近な生活文化や地域社会の変化などにかかわる主題を設定し追究する学習を通して、歴史への関心を高めるとともに、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる。」と説明されており、「地域社会の変化」が主題として取り上げられる可能性が示されている。また、日本史Bでも、「歴史の考察」が新設され、「博物館などの施設や地域の文化遺産についての関心を高め」させたり、「地域社会の歴史と文化」について考察させることが明記されている。

このように、新学習指導要領では、これまで以上に学校における学習活動と地方史研究とに深い関わりが求められている。さて、これまで『大分県地方史』に掲載された地方史研究と地域史学習との関わりに関する論文をみると、西別府元日氏の「本県出身学生の郷土先人観と人物学習について」(一一二号)・「地域史学習の理念と展開」(一四七号)、豊田寛三氏・野崎純一氏の「歴史学と歴史教育の結合を求めて―史料の発掘・位置付けとその教材化の試み」(一四二号)などがある。これらの論文を踏まえた上で、大分県地方史研究会としても、地域史学習への提言が必要な時期だと考えられる。

筆者は、「大分県における記録史料の保存・利用―その現状と可能性―」(『大分県地方史』一六〇、一九九六)で大分県における地方史研究の現状を分析し、「『地域』と地歴科・公民科教育」(大分県高教研地歴・公民部会『地歴公民部会研究集録』三五、一九九九)で大分県の高等学校における地域史学習の現状を分析した。これらを踏まえ、本稿では大分県における地方史研究と地域史学習の接点について検討し、今後の方向性を模索する材料を提供することを目的としたい。

一、地域史資料を取り入れた教育活動

ここでは、大分県の小・中・高等学校において地域史学習がどのように実践されているのか、近年報告されているレポートや研究論文などから、いくつかをピックアップして検討していくことにする。

(一) 小・中学校の社会科学における地域史学習

まず、小学校における地域史学習の状況を、大分県教育研究会に近年提出された各支部のレポートからみてみることにしよう。小学校において地域史資料を教材として活用しているのは、四年生の開発単元と六年生の通史学習である。

四年生の開発単元としては、井路などの開発状況を学習し現在の生活に結び付けようとする実践が多い。例えば、本耶馬溪町樋田小学校(第四八次中津レポート)では、「多志田に水を」という一九時間の単元を設定している。「水不足に苦しむ多志田の人々が困難を克服しながら井路を築き、地域の発展に貢献してきたことを理解するとともに、現在でも井路を大切に守り続けている地域の人々の思いを知り、自分たちも大切にしていこうとすることが出来る。」という考えから設定した単元である。現在に残る井堰のビデオを通して身近なものとしてとらえさせ、「井路づくりは、どんなことがたいへんだったか」ということについて考えるところにも、当時の道具を使用して「花壇造り」をさせ、大変さの模擬体験をさせている。また、大分市敷戸小学校(第四八次大分レポート)では「明治大分水路は生きている」という一三時間の単元を設定している。水路組合から脱退した地区がなぜ脱退したのかという児童の疑問を軸に、授業が構成されている。湯布院町湯布院小学校(第四八次大分郡レポート)では、「湯布院観光と油屋熊八」という二〇時間の単元を設定している。油屋熊八の活動を通して湯布院の観光・開発について学習できる工夫をしている。

六年生の通史学習としては、近世・近代の百姓一揆など民衆の動きが見えやすい単元に地域史資料を取り入れている実践が多い。例えば、国東町豊崎小学校(第四七次国東レポート)では、六時間構成で、「国東の百姓一揆」を学習している。この単元では、地元で起きた慶応二年の百姓一揆を学習の中心に据えている。「江戸時代の厳しい支配体制下でたくましく生きてきた豊崎の人達の生活を、国東の百姓一揆について調べることにし、とらえることができる。」という目標をたて、児童に調査活動をさせ、そこから考えさせようとするものであった。「一揆を過去の出来事とせず、現在の自分と結び付けていこうとする姿が見られた」という指導者の言葉に、地域史資料を取り入れ児童の活動を展開した意義があると感じられた。また、文化八・九年の岡藩における百姓一揆を題材とした実践に、朝地町綿田小学校(第四八次大野レポート)の一・二時間構成の「幕

藩体制の行き詰まり」や竹田市南部小学校(第四八次直入レポート)の一〇時間構成の「力をつける農民」がある。どちらも、「新法」としてすすめられた藩の政策とそれにとまなう民衆の生活の変化、民衆の勇氣と知恵などを中心に据えて、百姓一揆を幅広く考えさせようとしている。この他の百姓一揆を題材とした実践に、中津市大幡小学校(第四七次中津レポート)の一〇時間構成の「県北四郡大一揆」がある。明治一〇年の県北四郡大一揆について地元の史資料を調べさせる活動を通して、民衆のたくましさ、団結の強さに気づかせようとする実践であった。「地域教材だからこそ行えることとして、子どもたち自身、一人ひとりが育まれてきた生活状況や価値観で当時の人々の心情を推し量る(立場に立つ)ことができるということが挙げられる。」という考えを踏まえての実践であった。百姓一揆以外の地域史資料を取り上げた実践としては、上津江村上津江小学校(第四八次日田レポート)が一八時間構成で実践した「『日田どん』と老松神社のつながりを探ろう」、大分市敷戸小学校(第四八次大分レポート)が一時間構成で実践した「松平忠直の萩原配流のなぞ」、前津江村大野小学校(第四七次日田レポート)が一六時間構成で実践した「明治維新とわが国の近代化」、宇佐市柳ヶ浦小学校(第四八次宇佐・豊後高田レポート)が一七時間構成で実践した「宇佐航空隊と柳ヶ浦空襲」などがある。前津江村大野小学校の実践は、長三洲の願いや倒幕への積極的な行動を調べさせることにより、幕府が倒れた理由を考えさせるといふものであった。宇佐市柳ヶ浦小学校の実践は、調べ学習や聞き取りを通して、「柳ヶ浦の人々は、どんな思いで航空隊と関わったのだろうか」という発問を軸に展開されていた。

次に、中学校における地域史学習の状況を、大分県中学校教育研究会社会科部会などにおいて近年おこなわれた研究授業からみてみることにしよう。

大野郡清川中学校原尻裕之氏は、「武家政治のはじまり」において、地域史資料を活用しながら緒方惟栄を中心に源平の争乱について考えさせている(一九九三年大野郡中教研社会部会研究授業)。授業では、緒方惟栄に関する資料を提示し、「緒方惟栄は、なぜ、反平氏の行動を起こしたのだろうか。」という発問について考えることにより、平氏滅亡の理由を考えていくように工夫されていた。大野郡三重中学校後藤榮一氏は、「近世日本と世界の動き」一時間扱いの単元に「キリスト教徒の

墓が三重にある理由」を考察する時間を設定している(一九九九年大野郡中教研社会部会研究授業)。後藤氏は、「この時代の地域史料は、世界の歴史の断片を語り、世界史と地域史が一体となっていることを示している。その意味から、近世を学習するとき地域史料から歴史事象を追求する価値は高い。」と考へ、地域のキリシタン関連遺跡や「耶蘇会士日本通信」、ルイス・アルメイダに関する史料などを授業に取り入れている。授業後の生徒の感想には、「三重町にもこんな歴史があったなんて初めて知ってすごいと思った。」「自分の近くにもこういう有名な歴史が残っているとは知らなかった。」「また今度こんな学習がしたい。」などというものが書かれており、「地域史料をもとに問題解決学習を仕組むと生徒は学習したいという意欲が喚起され、主体的に学習に取り組めることがわかった。」と後藤氏は総括している。大野郡野津中学校木本邦治氏は、「幕府政治の行き詰まりと開国」七時間扱いの単元で「文化の百姓一揆はどのようにして起こったのだろうか」ということを考察する時間を設定している(一九九九年大野郡中教研社会部会研究授業)。目標の一つに「地域資料を活用することで、生徒の興味・関心を高めるとともに、具体的に歴史事象を理解させる。」ということ掲げている。地元にも波及した文化一揆を、地域史資料を活用して考察させようとするものであり、生徒の主体的な取り組みを仕組もうとしていた。大野郡中教研社会部会の総括では、「身近な地域資料を持ち込んだことで、生徒は一層興味関心を持ち、積極的に学習に取り組めた。生徒の意欲や興味関心を喚起できたということから、地域史料を活用した歴史的分野における問題解決的学習の有効性が確かめられた。」と述べている。宇佐市長洲中学校岩本浩典氏・岩本輝清氏は、一三―一四時間の単元「宇佐神宮とわたし」を設定している(一九九八年度大分県中社研夏季研修大会研究授業)。この特設単元は、「宇佐市の歴史の中心となり、生徒の生活とも関わりの深い宇佐神宮は、生徒にとっても興味を持ちやすく、課題解決学習においても、意欲的に課題づくりに取り組むことができる教材であると思われる。」という考へに立ち、宇佐神宮を中心に日本の古代社会を総合的にとらえようとして課題解決学習を設定したものであった。玖珠町古後中学校長谷川勲氏は、「近代日本のなりたち」の単元の「日清戦争」において、戦争のために民衆に大きな負担がかかったことに気づかせようと、「大分県内租税一戸平均負担額」などの資料を取り入れて考察させて

いた(一九九七年玖珠郡中教研社会部会研究授業)。授業の成果として「地域教材を授業の中で扱うと、興味や関心を喚起することができる」ということをあげている。

これらの他、地域史学習に関するものとして、大分県教育委員会(同和教育室)が編集した『学校同和教育指導資料―郷土資料を中心として―』(一九九八)がある。中学生を対象として「ケガレ意識ときよめ」「部落のくらし・役負担」「二通の免許状」「常人と異なることなし」などの単元があり、地域の史資料を活用して授業が展開できるように工夫されている。この『学校同和教育指導資料―郷土資料を中心として―』には、小学校・高等学校における授業展開についても記されている。

(二) 高等学校の地歴・公民科などにおける地域史学習

次に、高等学校における地域史学習の状況を、「日本史」や「政治・経済」などの授業に関して各高等学校『研究紀要』などに近年掲載された実践報告・研究発表からみてみることにする。

鹿毛敏夫氏は、「新課程『日本史A』の授業構成―地域史学習の視点から―」(大分雄城台高校『雄城台紀要』二〇、一九九四)、「大分県玖珠地域の歴史とその教育的可能性」(森高校『研修集録』一八、一九九六)、「地域史教育の実践的構成―地域に根ざした『日本史』の授業―」(全国社会科教育学会『社会科研究』四六、一九九七)などにおいて、地域史資料を授業に取り入れたり、地域史資料を中心に授業を構成したりした実践を報告している。例えば、「日本史B」の「地頭の荘園侵略」の授業において、地頭請・下地中分の事例として阿南荘に関連する史資料を提示し、特に地域的に関わりの深い生徒を「授業リーダー」として授業を構成している。また、グループ研究・発表によって古代から近世までの大分地域の歴史を学習していく「日本史A」の授業も実践している。鹿毛氏は、これらの実践の中で、生徒の歴史的地域社会認識の状況を踏まえることの重要性和、地域史資料を系統的・組織的に取り扱うことの重要性を指摘している。長野浩典氏は、「地域の歴史を取り入れた日本史の授業」(九州地区私学教育研修会『研究集録』三四、一九九二)において、地域史資料を活用したテーマ学習などについて報告している。テーマ学習としては、例えば、古川古松軒「西遊雜記」を題材に近世大分の農民生活について学習したり、

白杵・別府で勃発した米騒動の史料を提示し緊迫した騒動の実態を追究したりしている。また、校外への見字を取り入れたたり、視聴覚教材として自作のスライドを活用したり、さまざまな工夫がなされている。佐藤倫洋氏は、「日本史Aの年間指導計画」（碩南高校『研究紀要』、一九九四）において、地域史資料を近代以降を中心に年間指導計画の中に位置づけている。例えば、地元出身の後藤順平が西南戦争において西郷軍に加わった理由を考察することを通して明治維新を多角的に捉えさせたり、久大線の敷設状況を考察することを通して大正時代を中心に地元の近代化を概観させたりしている。佐藤氏は、これらの実践を通して、地域の視点を持ちつつ日本史を学習していく姿勢を生徒が持てるように工夫していた。筆者も「中高連携を踏まえた『政治・経済』の一事例」（大分県高教研地歴・公民部会『地歴公民部会研究集録』三三三、一九九七）、「『地域』と地歴科・公民科教育」（大分県高教研地歴・公民部会『地歴公民部会研究集録』三五、一九九九）などにおいて、地域史資料を活用した実践を報告した。例えば、「県内産業別就業人口の推移」「大分製鉄所製鉄量の推移」「県内銀行預金高の推移」などを生徒が調査・分析することを通して、大分県における高度経済成長の状況を検討し、日本全体における高度経済成長についても考察できるように授業を構成した。筆者は、「地域」に関わる様々な史資料を生徒が主体的に調査し考察することを身につけることにより、生徒の社会認識を深化・発展させることができると考えている。

また、ここでは紙幅の関係で触れることはできないが、高等学校における地域史学習を考える場合、「大分県高等学校文化連盟社会部」における生徒の自主的な調査・研究活動についても検討する必要性を感じている（「大分県高等学校文化連盟社会部」の活動については、拙稿「『地域』と地歴科・公民科教育」（大分県高教研地歴・公民部会『地歴公民部会研究集録』三五、一九九九）において考察しているので、参照いただきたい）。

二、地方史研究の成果を教育活動に

学校における地域史学習の現状を考えると、『大分県史』（一九八一～一九九一、大分県）や各市町村の史誌類などを参考文献

献として、教師が史資料を取捨選択して、小・中・高校生に提示している場合が多いといえる。ここでは、市町村史誌をはじめとして、地方史研究の成果を地域史学習をはじめとする教育活動に生かす方向性を考察することにしよう。

(一) 地方史研究の成果をより多くの人々に

大分県における市町村史誌の刊行状況をみると、ほとんどの市町村において編纂されている。『大分県史』が編纂されたということもあり、県内ほぼ全域で地域の歴史・地誌に関心が向けられた結果といえるであろう。ただ、記述は成人を対象としており、小・中・高校生が読むには難しい部分があることは否めない。より多くの人々が地域の歴史・地誌に関心を持ち、学校における地域史学習に活用していくとすれば、さらに工夫が必要といえるであろう。

そのような中で、小・中学生を主たる読者対象として刊行されているものがある。例えば、『きつきの歴史』(杵築市教育委員会、一九八六)、『こども竹田市史』(竹田市史刊行会、一九八六)、『なかつのあゆみ』(中津市教育委員会、一九九二)、『豊後高田の歴史』(豊後高田市、一九九八)、『ふるさと玖珠の歴史』(玖珠郡史談会、一九九八)などがあげられる。これは、カラー印刷を交えたり挿絵を大きく取り扱ったりして、地域の歴史を大づかみにして読みやすいものにしようと心掛けて編纂されている。また地域出身の人物を小・中学生に知ってもらおうと編纂されたものもある。例えば、『キリシタン大名 大友宗麟』(津久見市教育委員会、一九九四)、『才翁 長三洲先生』(天瀬町長三洲没後百年記念事業実行委員会、一九九四)などである。

地域出身の人物に関するものといえば、大分県先哲叢書『普及版』シリーズもある。大分県教育委員会では、一九九二年から大分県先哲叢書を刊行しており、その中に主たる対象読者を小・中学生とした『普及版』シリーズがある。このシリーズは挿絵を多く取り入れ、読みやすく内容を理解しやすいような記述を心掛けているものといえる。このシリーズで現在までに刊行されたものに、佐々木均太郎文・広瀬通秀絵『田能村竹田』(一九九四)、芦刈政治文・仲築間英人絵『大友宗麟』(一九九六)、松本文・早川和絵『滝廉太郎』(一九九六)、神崎信博文・利光敏郎絵『ペトロ岐部カスイ』(一九九八)がある。これ

らの書籍のように、小・中学生を読者の中心と想定して編纂されているものは、地方史研究の成果をわかりやすくまとめ、入門書として小・中学生の興味・関心を喚起するものであり、学校においても活用できるものといえるであろう。

このような試みの他に、史資料集においても、初心者が取り組みやすいような工夫をしているものがある。例えば、佐伯市教育委員会が一九九五年から刊行している『佐伯藩史料 温故知新録』がある。豊田寛三氏・橋本操六氏が編集責任者となっており、一九九九年には第三巻が発刊された。学術的史料という目的とともに歴史研究入門の手引きとなるように、本文を二段組とし、上段に原文、下段に大意を記している。学校においても、原文の内容を考えさせたり、大意を提示して説明したり、さまざまな活用を考えることができそうである。

(二) 史料保存利用機関における教育・普及活動

地方史研究の成果は、書籍として刊行されるだけではない。各地の博物館・資料館などの展示として、地方史研究の成果が示される場合もある。また、さまざまな講座が開設され、その中で地方史研究の成果が提示される場合もある。ここでは、史料保存利用機関を中心として、地方史研究の成果が提示されている現状をみていくことにする。

史料保存利用機関という意味を持つている各地の博物館・資料館などの施設では、展示の案内やポスターなどをさまざまな施設に送付・掲示するとともに、小・中・高等学校にも送付して、より多くの人々に見てもらおうような工夫をしている。また、小・中・高校生向けのパンフレットを作成している施設もある。例えば、大分市歴史資料館では、常設展示にあわせて『むかしつかったどうぐ(小学三年用学習ノート)』・『おもしろ大分の歴史(小学六年用学習ノート)』を刊行している。毎年入館者の五〇％弱を占めている小学生が見学する際の手引きとして編纂したものである。大分県立先哲史料館でも、小・中学生向けの展示人物解説として『大分県の近世の先哲一〇人VS近代の先哲一〇人』を刊行している。これらの取り組みのように、小・中・高校生への来館の呼びかけとともに、展示の意味をわかってもらおうという工夫が各施設でなされているのである。

また、地域の歴史・民俗などに興味・関心を持っている人々を対象とした各種講座を開設している施設も多い。例えば、緒

方町立歴史民俗資料館では「歴史講座」・「古文書講座」などを開催し、大分市歴史資料館では「ふるさと歴史再発見」として歴史・考古・民俗・古文書のコースを設けたりしている。大分県立先哲史料館でも「先哲講座」や「史料講座」が開かれていたり、大分県立図書館の公開講座では歴史探訪シリーズも開催されている。きつき城下町資料館でも「古文書解読初心者講座」が開催されており、「杵築藩御用所日記」などの解説を続けている。そしてこの講座から発展したものとして「古文書自主学習会」が有志により催されており、自主的に地域に関する史資料をテキストにして相互学習により古文書解読の技量を高めようとしている。自主的な講座・学習会としては、挾間町中央公民館においておこなわれている自主講座「歴史と古文書講座」などもある。これらをはじめとして大分県高等学校などの講座も含めて考えると、県内各地で地域の歴史・民俗などに興味・関心を持っている人々がかなりおり、各地の施設でさまざまな講座が開設されているといえる。

そして、講座は成人を対象としたものだけではない。例えば、大分市歴史資料館では、「夏休みジュニア歴史講座」を開催している。この講座では、「縄文・弥生土器づくり」や「むかし使った道具調べ」など、考古・歴史・民俗などの分野の史資料を直接手にして地域の歴史と文化を学べるような工夫がなされている。また、パソコン学習クイズを作成したりして、さらに興味・関心を持ってもらおうという工夫もなされている。大分県立歴史博物館でも対象を小学五～六年生とした「夏季子供歴史教室」を開催している。教科書では学ぶことのできない体験的な学習を目指し、毎年、様々な工夫がなされている。

むすびにかえて

このように、大分県における地域史学習の現状、地方史研究の成果を教育活動に生かすという試みについてみると、小・中・高等学校、史料保存利用機関、市町村史誌などの編纂機関などに勤務している人々が、それぞれに意欲的な取り組みをしているという全体的な印象がある。しかし、個別に試行錯誤しながら取り組んでいる段階であり、組織的な取り組みはなされていない。それぞれの持ち味を出し合い相互補完していく体制ができれば、もっと充実したものとなるように感じられるが……。

さて、このような現状を踏まえ、地方史研究と地域史学習の今後について展望しておきたい。今後の学校教育において地方史研究との接点が考えられるのは、小・中学校社会科、高等学校地歴・公民科だけではない。例えば、新学習指導要領により導入される「総合的な学習の時間」においても、地方史研究の成果が取り入れられる可能性がある。また、博物館・資料館などに勤務している人たち、地方史研究に携わっている人たちが外部講師として学校現場での出前授業もおこなわれる可能性がある。このように、今後、地方史研究と地域史学習の接点が増していく可能性があるのである。ただ、地域史資料を教材として提示するだけでは、無味乾燥なものとしか受け取られない危険性もある。地域の歴史の流れの中に生きる人々の生の姿に迫る工夫がますます必要となってくるといえる。「地方史研究と地域史学習の実りある交流」を一人一人が心掛けなければならぬといえるであろう。

そこで、地域史学習に携わっている者と、博物館・資料館などの史料保存利用機関や地方史研究に携わっている者との交流の場が必要と考えられる。地方史研究の最新・最良の研究成果に基づき地域史学習を作り上げることができるといえる。限界がある。様々な人々・施設の交流の上にたつてこそ、内容の充実した地域史学習をすすめることができる。いわば、地域総体として様々な立場から地域史学習に関わっていきけるような体制を作らなければならないと考えられる。まずは、それぞれの考えや実践を出し合い、話し合うことからはじめなければならないといえるであろう。

以上、考察を尽くせない点が多いが、大分県における地方史研究と地域史学習の接点について検討してきた。検討した資料も限られており、多々独断もあると考えるが、卑見を明らかにして、諸先学の御批判・御叱正をお願いするとともに、今後、地方史研究と地域史学習に関する論議が盛んになることを念願する次第である。

付記 本稿をなすにあたり多くの方々から御教示いただき、資料を提供していただきました。一人一人の御名前をあげることができませんが、